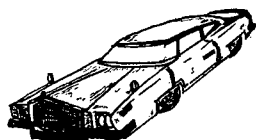


い。

最後にこの春、アメリカへ行った時の話。アメリカ人の大学の先生に勤務先をきかれて、「明治大学だ」と言うと、すぐにわかってくれたようだった。恐らく日本の近代化が明治時代から始まったということを、彼らは十分承知しているからのようだった。いちいち説明を英語を組み立てる手間が省けて助かった話である。

外国で免許をうまくとる法

田 村 光 三



「運転免許をとるにはドーナツラヨイノデアルカ」と私は、M州のA市に落ついて間もなくのある日、タウン・ホールの中地下にある町の警察署に行ってたずねてみた。アメリカへ行ったら、車は生活に欠かすことの出来ない道具であるから、すぐ免許をとり、車を買えと、先輩や友人たちにすすめられていたからである。はじめ私はなくて済ませるものならば、現代のもっとも普遍的な公害の元凶のひとつであるクルマなるものを決して持つまい、運転しまいと、心に決めていたのであるが、あちらで2～3日生活してみると、それがナベ・カマと等しく日常必要なものであることがわかるのだ。

当分の間は、知人がわざわざスーパー・マーケットへ行くために迎えにきてくれたので便利であったが、毎日ホテルかレストランへ行ったりしたのでは不経済であるし、近くの雑貨屋からパンや缶詰を買って生活していたのでは、すぐ飽いてしまうし不健康でもある。食事ぐらいは毎日まともに取らないで健康を害しては、「身体髪肌」をうけた父母に申訳はない。また、ウィーク・エンド位はすこし遠出でもしてみたいとなると、日本のように交通網が良く発達していない（みんな自家用車を持っているから、公共の交通機関を整備する必要

はないのだ) アメリカの田舎では、どうしてもクルマのやっかいにならねばならないことになる。

さき程の私の質問が通じたらしく、若い頑強そうな警官は、州警 (State Police) へ行くようにとその所在を教えてくれたので、早速その翌日に時間通りに来たためしのないローカル・バスで隣りの郡庁所在地であるより大きい市の、州警の交通課へ出向いた。

そこで前と同じ質問をすると、一冊のうすいパンフレットをくれて、これをよく読んで、まず法規の試験を受けに来い、と教えてくれた。この小冊子は約80頁位の教則本で、M州の “Manual for Drivers” 『運転者便覧』といい、ごく簡単に必要最少限度のことが、絵入り、多色刷りで非常にわかりやすく書いてある。(ちなみに、この内容は各州大体同じであるが、別の州へ行くと実地試験は免除されるが、第1次試験はその州の法規にしたがって新しく受け直す必要がある。)『便覧』と一緒にもらって来た身体検査証用紙を医師の所へ持って行って身心共に(とくに精神的に)健康であること、アル中ではない、などについて証明してもらう。これは友人の医師にたのんでもらう。

順序としては、日本と同様第1次が法規の試験で、第2次が実地試験である。さき程のパンフレットを一通り読んだ頃に、また窓口に出頭して第1次試験の予約をする。自分の都合の良い日時を指定してリザーブすることができる。この時の申込料は2ドル。

指定の日時5分前に点呼をとり、一部屋に入れて、視力を検査し、試験料10ドルを小切手で(現金は受けとらない)支払い、ペーパーをもらって、その時間から約1時間の間に、10(50ではない、「テン」である)の、やさしい問題を○×式で答えるのである。4・5分もあればできる位である。

例をあげよう。

“What is stopping distance?”

“How can you avoid “hypnosis” while driving?”

“What is considered a safe speed for night driving?”

等々の、主として安全運転のための基本的なルールについての質問である。

出来たら答案用紙を試験官のところへ持って行くと、○×を書き入れた解答欄に「カギ」を重ねあわせてチェックする。受験者の目でやるから公正であるが「カワイ子チャン」には手加減が出来ないこともなさそうだ。間違ったものについては、その場で正解を教えてくれる。

こうして10問中8問出来れば合格である。

「グード」とか何とかいって、試験官は無雑作にピンク色の紙にサインしてくれる。これが「ラーナーズ・パーミット」と呼ばれる運転練習許可証、つまり「仮免」である。これを持たなければ練習が出来ない。といっても、練習には、正規の免許証を持った者が常に添乗していなければならない。大てい自分の親父か友人にたのんで実地習得するらしいが、適当な人がいない場合は「学校」に入る。「ドライバーズ・スクール」といっても、日本のように練習コースを持ち、教師を何人もかかえ、体系的な学習をさせるような「教習所」はない。あってもごく限られた大都市にしかないようである。

あちらでは大てい「個人指導」である。電話帳を引くと「ABCドライバーズ・スクール」といった名前がのっているが、何のことはない、それは大てい教師1人と車1台と電話だけの「学校」である。それに事務員がいれば良い方である。いくら電話かけても通じないので、道路で見かけた「○○ドライバーズ・スクール」という看板のつけた車に手をあげ止め、

「予ハ運転ノ学習ヲ欲スル」

といったら、ニコニコしたオッサンが、

「パーミットをとったのか」

と聞く。「ヤー」というと、

こりゃ本気に習いたいのだな、と了解したらしく、まあ車に入れという。あとで解ったが、そこがこの「学校」^{スクール}のオフィスであったのだ。

このオッサンは手帳をとり出して次回からの日時のアポイントメントを書き入れ、費用は、教授料1回1時間10ドルと車の使用料1ドル、計11ドルで、約15～20回位やらなければ駄目だ、という。

「予ハ急イデイル、モット早く出来ナイソカ」というと、日本人はせっかち

でいかん、とは云わなかったが、それは当分やって見なければ何ともいえない、という。「ぢゃOK」というと、次の日から、私とむこうの都合の良い日に合わせて何回か練習することに相成った。オッサンが迎えに来てくれる時もあるし、私から出向いて行く時もある。

第1日目。「先生」は私を横に座らせ、これがハンドル、これがギヤーレバー。左足でブレーキをふんだまま右でほんのすこしアクセルをふんでガソリンをおくり、キーをまわしてエンジンをかける。それから、レバーをドライブに入れ、少しずつブレーキをゆるめる。発車である。「わかったか。さあこの通りやって見ろ。」という。そこは普通の街路である。馬鹿にするにも程がある。今日はじめてだというのに……。こいつは日本人に何かうらみでもあるのではないか、など感ぐる。日本男児の名誉にかけても（やはり私も古い日本人的心性の持主か?）、と平静をよそおって、発進作動をする。動いた。地球が大きく動いた感じである。とにかく今は直進しか出来ないのだ。スピードが上がる。隣のオッサンがさかんに「イージー・イージー」となだめるようにいう。間もなく車を道路の右ワキによせて、停車せよ、という。ガクンと止まる。レバーを「パーク」にもどして、ブレーキをかけ、エンジンをとめて終りである。ワキの下に汗がビッショリ。日本でも何回か練習したことはあったが、路上ではまったくはじめてである。とにかく、このようにして3～4日している中にすっかり馳れてしまったが、ルートはきまって同じである。あとで解ったことだが、これが実地試験の時に警察が使うルートであった。そこにはゆるい坂がひとつと、信号が3カ所ばかりあって、技術的にむずかしいところは坂の中腹で一時停車し、それから発進して、そこで向きをかえる（これをK字ターンと呼ぶ）ことだけであり、あとは信号の確認がきわめて厳しいということである。7・8回すぎた頃、この位なら大丈夫と思ったから、試験をうけたい、というと、オッサン「まだまだ」という。彼にすれば、1回ごとに11ドル入るのだから、警察の試験のアポイントメントがとれないとか何とかいって、なるべく引きのばそうとする。私の利害はそれと相反するのだから「早く」とせっつく。11回目によく「仕方がないブツブツ」といって受けさせてくれた。

受ける前に1時間練習し、その同じ車で試験を受けるのだから、今日は22ドルの小切手を書けとこのヤンキーはいう。実際は試験に10分もかからないのだからあとの11ドルは暴利だとは思ったのだが、今このオッサンに尻を向けられては台無しと思い、しぶしぶ同意する。

試験は、発進、信号停止、手信号による左折右折、坂上停止、K字ターン、所定位置駐車、バック、以上である。とにかくゆっくりゆっくり正確にやるのがコツである。試験官に、こいつは絶対に事故をおこさない、と印象づければ成功である。

私の横には試験官が坐り、うしろの座席には例のオッサン「先生」が控えていて、試験官に見えないようにさかんに「イージー、イージー」と手まねで私にサインをおくる。試験官は、「お前は日本人か」「何をしにここに来ている」「俺は朝鮮動乱の時、東京へ寄ったことがある」「日本はいい所だ」「とくに富士山（と「何とか」……とはいわなかったが）はきれいだった」等々、さかんに話しかける。こちらは試験をされている身だから、そう世間話をしている余裕はない。「オー、ヤー？」とか、「イエス・サー」とか、「リアリー」とか何とかいってごまかしていたが、いつの間にか全コースは最後のバック、パーキングをもって終わった。最後が大事と思い慎重にレバーをもとにもどして、エンジンをとめる。

試験官と共にオフィスに入ると、

「アイ・インジョイド・ユア・ドライヴィング・ヴェーリ・マッチ」ときた。合格である。

合格証明にサインをし、ゴム印をパンパンと捺して、正規の免許証は後日送る、という。しかし、この証明があれば、その日からでも運転出来るのである。

私は、この「親日家」の試験官と人の良い「ヤンキー」オッサンにていねいに礼をいい、州警のオフィスを出た。そうそう、「学校」の「先生」には2時間の教習料のほかに、少しばかりのチップを加えた小切手を手渡すと「お前はラッキーだった」といって手を握り祝してくれた。それから、私はこの地の名物「ラブスター（伊勢エビのでかいやつ）」を3尾お祝いに買い、近くのレン

タ・カー事務所で借りたオレンジ色のホーネットにのって颯爽と宿へ帰った。その日のエビのうまかったことはいつまでも忘れない。以上清算してみると11回の練習とエビ代を含めて140ドルかかったことになる。

その後、新学期からはP州へ移ったので、そこでまたP州警の免許をとらなければならないことになった。もっとも、M州でとった免許でどこの州でも運転は出来るのであるが、もし事故をおこした場合、無免許運転と同列に処分されるから、「P州に入ったらP州に従え」のコトワザ通り、その州の免許をとった方が安全である。ここでは医師の健康証明と4ドル出し、視力検査と交通標識の判別力検査と法規に関する10の口頭試問がある。会話を出来れば、M州の筆記試験よりはるかにやさしいし、情状酌量を許容す余地が大きいように思えた。私の場合3～4問しか聞かれなかったように思えたが、すぐOKとなった。口頭試問の場合、試験官がナマリのつよい人である場合、仲々ききとれないので損である。特に日本人のように、まともな英語しか耳にしていない外国人だと、「え」とか「パードン？」を連発することになり、ひいては「そんなこっちゃ運転出来んぞ！」と一カツされて、すごすごと引きがることになるからである。

口頭試問が通れば、他州の免許をもっているものは実地試験免除で、免許証申請書にサインをし、10ドル小切手をつけて提出すれば、何日か後に正式の免許証が郵送されてくる。これには免許番号と生年月日、氏名、住所、署名、および有効期間が書いてあり、写真はない。

車は中古車を買う。少し高いが、衝突した時の安全を考えて大型を買えといわれる。約1,000ドル(30万円)で立派な、パワー・ステアリング、パワー・ブレーキ付きのものが買える。私は友人の紹介で4百ドルのものを手に入れたが、時々スタートがかかりにくいことがあるので、しばしばサービス・ステーションの世話になる。その度に修理工から構造について教えてもらい、自分でも毎日メンテナンスに気をつける。少しずつあっちを直し、こっちのパーツを取りかえることによって、次第に調子がよくなる。こうなるとポンコツ車でも愛着が濃くなるものである。日本人のように新車を買って、いつもトラブ

ルがない状態だと、自らボンネットを開けてみようとしめない。したがって構造については教則本で知っていても、本当のことはついぞ知らないままですごしてしまうのだ。

しかし、アメリカ人は懸命に構造を研究し、自分でトラブルを直す技術を身につけておく。大学の中にはそのような講習会も開かれる。かれらのボディーは傷だらけだが、エンジンは快調である。

日本に帰ってきて、アメリカの免許を日本のに書きかえるためには、近くの「試験場」に出頭して必要な手続きをとる。ただし、それはアメリカの免許の有効期間内でなければならない。必要書類は一般の試験申請と同じ。ただし、パスポートとともにアメリカの免許の翻訳を添付することが必要。

また、むこうを出る前に「国際免許証」(International Licence)をとっておけば、1カ年間、中共と北朝鮮以外のどこでも使用することができる。それをとるには州警またはAAA(日本のJAFと同じ組織)へ行き、写真2枚と3ドルを持って行けば、その場で作ってくれる。

さて、日本では申請して約三週間後、免許証を受けとるためにK警察に出向いた。免許交付のカウンターにいた若い女子職員が、まるで罪人にでも詰問するように、私にどなった。「何の免許!」「何時受けた!」「700円!」。

とたん、夢から目がさめたのであった。